

戦時略奪金塊の回収や秘密の裏金を隠すための偽情報が続いた半世紀の後、調査や訴訟、情報漏洩や大失敗などから、論争の余地のない明白な証拠が出現しつつある。マルコスが権力を失うまで、日本の略奪品の存在は事実とかけ離れているとまぐごまかしてきた。もし、日本の略奪がほとんどなかったと言うなら、略奪品がどうなったかをどうして尋ねるのだろうか？

しかしながら、マルコス家はあるときアメリカの領内で回収された財宝を窃盗し横領したこと、その財宝に係わる人権侵害、不正な商売をしたかどで訴訟され、攻撃を受けた。裁判所で次に明らかになった新事実は、秘密のベールを押し上げ、アメリカ政府の秘密行動が予期せず露見することになった。レーガン政権のイラン・コントラ事件中の被害対策についての不手際は、とりわけこれまで知られていなかった違法な活動や、民間の軍事情報会社の組織がアメリカの外交政策や国家安全保障を私物化しようとしたことを明らかにした。彼らの真の目的が、法律問題をうまく避け、議員による調査を避けることにあることが明らかになった。

二十五年間、サンタ・ロマーナの後継者（相続人）もまた捜査の妨害をされたが、アメリカの銀行に隠されている多くの金塊を回収するためには訴訟を起こした。金塊の多くは我々が今示しているようにまだ銀行に眠っている。

確かな証拠としてのかなめとなる事例は金の仏像である。なぜなら、これがアジアでの日本の略奪行為と、この略奪品の戦後の回収を証明する間違いのない基本的な物証なのだから。この証拠はハワイのアメリカ

法廷で陪審員団に示され、それは歴史上、金額としては最大のものである。

それは次のように起こった。数年間姿を隠した後で、ロジャー・ロクサスは一九八八年に再び登場した。マルコスはホルルルで自宅軟禁状態にあつたので、ロクサスは訴訟を起こし、一九七一年に自分が盗まれた金の仏像と金塊を取り戻しても安全であると考えた。彼はジョージア州アトランタの近くに住む子供時代の友人フレックス・ダキャニーと連絡を取った。彼はアメリカ社会で成功しており、アナポリス海軍兵学校に通う二人の息子がいた。ロクサスを守るために彼とダキャニーは、「金の仏像会社」、つまりGBCを設立し、ロクサスはGBCに財宝における彼の権利を譲渡した。ロクサスはもはや要求に対して支配権を持たないので、脅されたり権利を騙し取られることはあり得ないだろ。

ダキャニーのジョージア州の弁護士は外部の助けを探し、ロサンゼルスにある有力なダニエル・キャスカートの会社と合意に達した。一九八八年二月に、キャスカートはホルルルのマルコスに対し、殴られたり拷問されたりしたけがの補償も含んだ損害賠償を求め訴訟を起こした。訴訟では、マルコスはロクサスから金の仏像、ダイヤモンド、金塊を盗み、ロクサスが発見のため数年を費やしたトンネル（坑道）から多くの金塊を持ち去ったと訴えた。法的に言えば、ロクサスは、金の仏陀、ダイヤモンド、そして彼が家に持ち帰った金塊だけでなく、後に、マルコス側兵士によって貯蔵場所から回収された日本軍の戦争略奪品のすべての発見者なのである。

ハワイでマルコス一家は嘲笑していた。軍副官のアルツロ・アルイザは報道陣に、「山下将軍の金塊話は十六年前に出てきた夢物語だよ、…フリーピン上院による調査も行われたが、何にも出てこなかったじゃないか。十六年も前に却下した話さ、もううんざりだね。」と言った。

キャスカート弁護士のは社は七年をかけ、フィリピンに日本人の盗賊がいたこと、ロクサスは中味の詰まった二十二カラットの金の仏像とインゴットを発見していたこと、マルコスはその金の仏像とインゴットを盗み、それをもみ消すためロクサスに拷問を加えたことを立証する目撃者の証言を集めた。

目撃者を突き止める過程でいかにして略奪品が島内に隠され、いかにして略奪品をマルコスが回収し、いかにしてマルコスが世界市場へ金塊を持ち込むためアメリカ政府の助けを借りたのか、という日本軍の略奪品の全貌に係わる証拠が大量に浮かび上がってきた。

これら全ては書類、宣誓供述書として集められ、その多くはビデオテープの形に保存され、結局は大きな部屋をいっぱいにするほどの量だった。

取材調査は、キャスカート弁護士に雇われたロサンゼルス元気のいい私立探偵アーリン・フリードマンによって行われた。彼女にとって、ロクサスが最初に話した話は全くの夢物語だった。山下將軍の金塊は量があまりにも莫大で、ドルに換算すると大変な額だったのでにわかには信じられなかった。陪審員団を納得させるために、キャスカート弁護士と探偵フリードマンは表に出たがらない（世評を避ける）金のブローカー、秘密にしておくことを切望する財宝ハンター、殺害されることを怖がる目撃者を突き止めた。小柄な女性だけれど非情な探偵フリードマンは、第二次世界大戦以来、何が多くの人を威圧し、何をたくみに避けてきたかを明らかにし、その過程で日米政府のもみ消し工作に関する驚くべき発見をした。

「その調査が合法で私に精神的荒廃をもたらさない限り、私は情報を

得るためならどんなことでもするわ。それが無口女や、浮気女の振りをすることでも、シャーリー・テンブルの衣装を身に着けることだとしても、私はやつちやうわ。」とフリードマンは私たちに言った。キャスカート弁護士がフリードマンを呼び出しロクサスに会った時、彼女はロクサスのでこぼこで不恰好な形の顔と、突き出して失明した左眼にギョツとした。（マルコスの暴漢にゴムの槌で殴られた後遺症である左眼の件は第10章で報告されている）

キャスカートは五日間に渡ってロクサスに余す所なくインタビューをした。ロクサスの記憶から、やっと細かなことまで聞き出して、キャスカートは何が行われたかを知っている十人の人間がまだ健在だろうと結論をだした。

キャスカート弁護士は探偵のフリードマンに、その十人のひとりずつを徹底的に調べるよう依頼した。多くの年月が過ぎていたので調査は簡単ではなかっただろう。

ロクサスはフィリピンに配置された一人のアメリカG.Iを思い出した。彼はバンギオにあるロクサスの家を訪ねて、金の仏像が盗まれる直前にその仏像と一緒にロクサスの写真を撮ったのだ。そのG.Iの名前は「ティム」か「チテム」だったようだ。フリードマンは国防総省の記録を熟読するうんざりする作業を始めた。一年以上たつて、彼女はケン・チャーザムにたどりついた。彼はラスベガスのホテルで夜の警備員として働いていた。「それはユーレカ！（わかったぞ！）のようなものだったわ」と彼女は言った。

チャーザムが後に陪審員に語ったことによると、千九百七十年代初め二十六歳だったチャーザムはクラーク基地に配置された空軍情報将校だった。アマチュアの財宝ハンターのチャーザムは山下將軍の金塊の話に興味

をそられて、日本軍の隠匿場所をさがすためバギオに車でやって来た。この時がまさにロクサスが金の仏像を回収し家に持ち帰った時で、行楽地では現地の人間達がなにか驚くべきものを見つけたという噂まで持ちきりだった。チーザムはドアをノックし、自己紹介をした。二人は、ジーン・バリンジャーが運営する同じ財宝探索クラブのメンバーだった。ロクサスはチーザムを奥の寝室へ連れて行き、金の仏像を覆っているベツドカバーを取りはずした。金の仏像はまだ頑丈な紐でぐるぐるに巻かれていた。

チーザムはカメラを取り出し、ロクサスと仏像とチーザム自身も一緒に写真を撮った。それはチーザムがそこにいて、金の仏像が存在したことの反論できない確かな証拠だった。クラーク基地へ帰って、チーザムはロクサスと金の仏像が写っている写真を同封してバリンジャーに手紙を書いた。バリンジャーは財宝探索人の会報に、回収に関する記事を発表した。間違ってチーザムをロクサスの相棒として扱っていた。この話は有線ニュースに取り上げられ、また、アメリカ軍事新聞、スター・アンド・ストライプにも紹介された。

マルコスはその記事を見て、かんかんに怒った。チーザムは基地の保安部に呼び出され、そこでCIA将校とマルコスの代理人と対峙した。チーザムは探偵のアリーソン・フリードマンに「CIAの奴は、その仏像は純金製ではないと言えと言った。話を控えめにしろと言ったのだ。そうすればマルコスが前への関心を緩めるだろう。お前がこの件に関与するなら、船でヴェトナムに運んでしまおうと言ったのだ。」と。

チーザムは怖がった。CIA将校の無理強いするとおり、仏像が金で出来ていないことを証明する供述書に署名をした。チーザムはキャスカートに、その時からずっと仏像は真鍮製であり、とにかく純金製ではないと嘘を言ったと話した。ハワイでの裁判で、チーザムの写真は、ロク

サスが動かせる頭部のついた仏像を所有していたこと、マルコスによって急いですげ替えられた固定した頭部のついた真鍮製の仏像とは違ったというはつきりした物的証拠を提供したことになる。

次に、キャスカートとフリードマンは金の仏像を盗んだのはマルコスだったことを立証せねばならなかった。ラスベガスでフリードマンはロバート・カーティスと接触し、結局カーティスは一本の長い宣誓供述の入ったビデオテープを彼女に与えた。

ビデオテープには、一九七五年に彼とマルコスが多くの時間をどのように過ごし、動かせる頭部を持った純金の仏像をマリベレスの避暑用宮殿内の大統領執務室で見たことが述べられていた。カーティスは、自分はその仏像を念入りに調べ、頭部のねじを廻し、冶金学者として仏像は純金製と確信できたと証言した。チーザムの撮ったカラー写真をみてカーティスは、写真の仏像は彼がマルコスの避暑用宮殿で見たものと確かに同一だったと証言した。(この仏像には形・色・細部において間違えようのない独特の特徴があった。)

弁護士ダニエル・キャスカートはまた、仏像は本当に純金製だったのかという疑念を振り払う立証をしなければならなかった。その立証の答えは、フィリピン人の金細工職人のルイス・メンドーサによりなされた。彼は一九七一年にロクサスの家で仏像を検査しており、仏像の首に近い背中に小さな穴を開けて必要な検査が出来るように金粉を取り出した。メンドーサは、検査の結果、仏像は当時のアジア標準で二十一カラットだったと証言した。

金の仏像はさておき、ロクサス自身が後で回収しようとするトンネルに封印していた金の小さな延べ棒や数千の金塊が盗まれたのだ。フィリピン人の軍隊料理人のジュアン・クイジョンは、マルコスとバー將軍によって一九七二年に作られた陸軍チームで、ひそかにフィリピンの財宝隠匿場所を発

掘する「回収特別作業班」に配属されたとホノルルの法廷で証言した。クイジヨンはほぼ一年間（一九七四年～一九七五年）、バギオの病院裏でトンネルを掘る兵士たちと共に過したが、そこでロクサスは金の仏像を発見していた。

クイジヨンは一度に三、四人の男たちが大きな木の箱を運び出すのを見ていた。クイジヨンはいくつかの腐った箱が壊れ、大きな金の延べ棒が地面に落ちるのを見た。延べ棒はひとつの箱に三本入っていた。金の延べ棒の入った箱が十二か月の間、一日に平均十箱がトンネルから運び出された。クイジヨンは言う。病院の職員もこの間の作業を見ていたので、この事実を追認している。クイジヨンが言うにはイゴロト族の男たちは大変過酷な作業をしたのだと。全ての金の延べ棒が運び出されたときに、イゴロト族の男たちはトンネルに連れ込まれ、撃ち殺された。目撃者としての彼らを抹殺するためであった。

マルコスが、知られているフィリピンの金の備蓄よりもはるかに上回る莫大な量の金塊を所有していたことの証拠として、探偵フリードマンは、一九八〇年代の初めに、一兆六千三百億ドルの金を売るための九件の契約をマルコスと結んだ二人のオーストラリア人の仲買人を突き止めた。

陪審員にとって満足のいくものだったが、二人は金塊の取引は行われ、作り話ではなかったという裁判記録を立証した。二人が提供した証拠文書のおかげで、マルコスが本当に一兆六千三百億ドル相当の金塊を所有している、本当に売ったのかどうかという疑念を払拭することになった。

オーストラリア人の仲買人は、マルコスを訪ねたとき、目隠しをされて倉庫に連れて行かれ、そこで目隠しをはずした時倉庫は金塊でいっぱいだったと証言もした。

ラスヴェガスの投資家であるノーマン・トニー・ダカスはフリードマン

に対し、フィリピンに行くとマルコスは、彼をアメリカにあるラシユモア山公園のようなマルコスの記念館を建設しているアポ山に連れていったと言った。大統領の息子のボン・ボンがアポ山の秘密のトンネルにダカスを連れて行き、そこで、金の延べ棒や他の財宝の入った箱を見せた。

ボン・ボンはこの金塊がCIAの指示で米国軍によってフィリピンから飛行機で運び出されるのを待っていると説明した。投資家ダカスはマルコスの上級情報将校の一人、ピメンテル大佐と結婚によってつながりがあるので、専門の情報通だった。ピメンテル大佐は多くの金塊取引の段取りをつけ、自ら金塊を目的地まで「アンブレラ」の上級メンバーとして送り届けた。第十四章で述べたとおり、ダカスはピメンテルとマルコスを助けた。ルクセンブルグの金塊取引の仲介をし、見返りに莫大な手数料を受け取っている。

金の仏像事件に関する多くの探偵フリードマンの調査は図書館と公文書保管所の中での大変な作業だった。

そこで、彼女は資産とビジネス記録に関する数万ページをゆつくりと読み進んだ。記録文書の調査を始めたことがフリードマンに危険を招くことになった。ある朝、彼女が駐車場入り口の階段に入った時、一人の男が彼女を後ろから掴んだ。「話がある。おとなしくしろ。」彼は言った。彼女はパンチをお見舞いし、逃げ道を作り、二、三の傷と打撲を受けただけで逃げ出した。

センチュリー・シティのグラス・タワーにある弁護士キヤスカートの八階事務所は侵入され、盗聴器が仕掛けられた。機密保護の専門家は、盗聴はマルコス一派がやったのではなく、アメリカ政府がやったものとキヤスカートに説明した。というのは、アメリカ政府以外に誰も使わないほどのハイ・テク機材を使っていたからである。彼の法律事務所は向かい側の高層ビルに待機するチームにより常に監視下にあったのだ。

金の仏像の公判がようやく千九百九十三年五月二五日に決まった。

裁判の日が近づいたので、キャスカートはロクサスに身を隠すように言い、マニラからホノルルへロクサスを連れて行くためのボディガードを手配した。五月二十四日に、キャスカートはロクサスに電話をかけ、すぐにハワイ行き飛行機で飛ぶように指示した。

「一時間半後に彼は死んでいたんだ。」とキャスカートは言った。

ロクサスの未亡人と多くの知人はロクサスが毒殺されたと信じている。未亡人が説明したのは、彼女の夫ロクサスは疲れて元気がないように見えた。二人が身を隠していたアパートの階下にあるパン屋に彼女が行ったとき、身なりのいい男性が近づいてきてロクサスのために無料の薬を上げようと申し出た。ロクサスはその錠剤を飲んで死んでしまったのだ。

二、三時間後、キャスカートや探偵フリードマンと知り合いのCIAの情報提供者がマニラからキャスカートの法律事務所へ電話をかけ、フリードマンに、「おまえの依頼人は死んだぞ。毒殺された。イメルダがそれを命じ、我々が実行したのだ。」と伝えた。

その知らせにキャスカートは肝をつぶした。「私はロクサス夫人に、残っている薬を国際便ですぐに私のところへ送るようにと指示したんだ。しかし荷物が到着した時、封筒の中は空っぽだった。」とキャスカートは言った。キャスカートはすぐに死体解剖を手配したが、それは不可能だった。ロクサスは慌ただしく火葬されていた。

「検視官は毒物検査をこれまでやったことがないし、ロクサスの死因について本当の事を話すことはなく、ロクサスは結核で死んだと断定したのだ。」とキャスカートは言った。

何度も延期されながらもようやく裁判はホノルルで始まり、陪審員は金

の仏像、金の延べ棒でいっぱい部屋、数千トンの金塊の取引について目撃者が述べるのを聞いた。フィリピンにあるいろいろな日本帝国軍の財宝隠匿場所に関する審議のなかで、ある時イメルダ婦人自身は、マルコスが自分の倉庫に所有していた金塊は「こうした隠匿場所のいくつかから持つてくる事はできた。」と証言した。

ロクサスファミリーのメンバーは、イメルダ婦人から数千ドルの支払を受けたロジャー・ロクサスの兄弟、ジョセ（ホセ）は、ロクサスの仏像は金製ではなくただの真鍮製だと述べる嘘を言い、偽証したと証言した。公判中に、陪審員はホセの背中にある大きな文字の刺青が写っている写真を見せられた。

### 金製の仏像の発見者の兄弟

#### 国際ニュースフィリピン

こうしたすべての証言から、日本軍の戦争略奪品がフィリピンに隠され、ロジャー・ロクサスとその主要な隠し場所を発見し、金の仏像は純金製であり、その財宝をマルコスが盗み、回収された略奪金塊のうちの数十億ドル分をマルコスが大きな金塊取引で売ったことなどが明らかになった。

陪審員はロクサスとその相続人に対して有利な裁定して、マルコス家に対し、金の仏像会社（GBC）に四百三十億ドルの賠償金を払うように裁定した。四百三十億ドルという金額は当時史上初の大きな民事判決だった。（二百二十億ドル+窃盗以来の単利一〇％）

後に上告で、ロクサスのトンネルからマルコス一派の兵士が回収した木製の箱すべてに何が入っていたかを確実に知る者は誰もいないと言う主張を基に、この賠償金は二十二億ドルの低い額に減額された。この案件は現在キャスカートがハワイ最高裁判所へ上告し審議中である。

スイスのチューリッヒの主任政府任命検事はジャーナリストたちに、金

の仏像自体は、チューリッヒ・クローテン空港地下の特別保管室のマルコス金塊貯蔵所にあつたと断言した。

アメリカ人の陪審員はこれ事態、議論の余地のない明白な事実だと判断しているものの、日米政府はそれを否定し続けている。

ロクサスの訴訟に勢いを得て、他の被害者たちが名乗り出た。一九九九年に、ロクサスのトンネルや他の隠匿場所から金塊を運び出したフィリピン人兵士たちが、マルコスの財産に対し異議申し立ての訴訟を準備した。ほぼ百人の兵士たちが署名をした宣誓供述書によると、彼らは国家史跡の復旧作業を装った大掛かりな発掘作業を行い、数千トンの金塊、他の貴金屬、大量の宝石用原石を回収した。マルコスは発掘場所にやって来るときにしばしば日本人を連れていたと兵士たちは証言した。

彼らの最初の大きな発掘成功は一九七三年でラグナ州ルンバンのカリラヤ湖の近くだった。そこで掘削機のひとつが、いくつかのコンクリート製貯蔵庫を始めて掘り当てたのだ。

掘削機をがんと何度も使い貯蔵所の一角を打ち破り、七五<sup>キ</sup>の金の延べ棒を掘り出した。マルコスは「いいか。ここにあるすべての宝は全員で共有するのだ。しかし、分配は時機が来るまで待たねばならない。」と彼らに言った。時機は決して来なかった。

他のコンクリート製の貯蔵庫が発掘された時、それは6フィートx5フィートx5フィートの大きさだったが、巨大なクレーンが貯蔵庫を吊り上げ大きな陸軍の戦車輸送車に乗せ、輸送車は秘密の目的地まで運んだ。

一九七四年から一九七九年まで、兵士たちはリザル州にあるすべてのゴールデン・リリーの隠匿施設であるモンタルバン、アンティポロ、バラスそしてテレサで発掘作業をした。一九七四年のテレサ1地区の発掘は彼ら

の失敗だったが、翌年のロバート・カーティスがテレサ2地区をうまく発掘することにつながった。彼らは活動をマニラの古い壁に囲まれた市街、イントラムロスに移し、続いてサンティアゴ要塞に移した。そこで百個以上の財宝の箱を回収したと兵士たちは言った。

兵士たちの宣誓供述書によれば、金の延べ棒の入った仕切り箱はマニラ国際空港からC-130軍用機を使ってフィリピンから運びだされた。

「アンブレラ」の組織としてバー將軍がマルコスのために保有し運営しているタマロー保安サービス社が手配し、金塊のいくつかがキャセイ・パシフィック航空、アメリカン・プレジデント汽船会社により商業的に輸送された。

これは、我々が先の章で詳しく述べたことやロバート・カーティスや他の人間が別々に証言で述べた事とは別個の共同作業で、回収チーム自身により行われた。

サンタ・ロマーナの休眠銀行口座は彼の相続人に対して特別に高金利であつたし、又、エンタープライズやアメリカ財務省、そしてサンティの現金と金塊を保有している主要銀行に対しても同様であつた。このようにいろいろない争い、策謀、中傷があり、彼等はいへん興味深い訴訟に巻き込まれることとなった。ばらばらに見ると、その断片はとも興味深い。しかし、まとめて見るとそれらは驚くべき物であり、しかも政府の記録で立証されているのだ。

サンティが死んだ時、サンティは十四人の相続人に、弁護士が五百億ドル以上の価値があると評価した財産を残した。銀行に預けられたサンティの資産を回収しようとする彼らのすべての努力は、妨害されるか、しばしばうまくはぐらかされた。

三人の主な相続人はサンティの会社の会計士で、資産確保のための活動をしているタルシアナ・ロドリゲス嬢、内縁の妻のルツ・ランバノ、そして成人した娘、フロデリーザである。なかなかうまくいかないため、彼らは有名なサン・フランシスコの弁護士、メルヴィン・ベリ、ニューヨークの弁護士、エレノア・ピール、元CIA副長官、レイ・クライン、そしてアメリカの著名な銀行家シティバンクのCEOのジョン・リードに助けを求めた。フロリダのロビイスト、ジョージ・デポンティス、元バハマ最高裁判所判事レオナルド・ノウルズ、ワシントンの弁護士ロバートA・アカーマンもまたこの仕事に関わった。

サンティの資産があまりにも大きいので、そしてその秘密性ゆえ、内縁の妻ルツ、会計士タルシアナ嬢そして娘フロデリーザは回収活動のなかで考えられるありとあらゆる妨害を受けたようだ。

アメリカ政府とアメリカの銀行はサンティの資産をそのまま残しておきたかった。それはスイス政府も、スイスの銀行も、香港や他の金融センターにある銀行も同様であった。もう数年もたてば、サンティにつながるのがある全員が死に、サンティの現金と金塊は銀行の中で何も手をつけられないまま残ることになるだろう。ちょうどホロコースト(ユダヤ人大虐殺)で奪われた金塊のように。

アメリカ政府にとって、事実を隠蔽しておくことは関係する資産が膨大だからだけでなく(Schlei 事件の時のように)、弁護士が証拠開示を求めるとの妨害するためにも必要なことである。証拠開示はサンティの財務資料よりはるかに多くのことを明らかにできるのだ。

もしかすると、証拠開示によって隠された戦時略奪金塊の回収の目的すべてが公開されることにつながる。

M資金と同じく闇の金を不正目的のために使うようになった黒い驚信託の

ように。

このことは名声や経歴に傷をつけることになり、議会の会計監査室による調査を避けられないだろう。

フォード大統領は一九七五年に同じような問題に取り組み、CIAファミリー・ジュエル事件への関心をおさえるために、ロックフェラー委員会を立ち上げ、トルーマン以来のすべての米国大統領の名声が傷つくような情報が出ることを望まないと述べた。

皮肉であるが、サンティの相続人たちは自分たちの貧乏を終わらせることに関心があっただけで、不正行為を暴露することに関心があったわけではないから、気前のいい和解金さえあれば二度と問題を持ち出さないといい合意書に署名したのである。けれども、銀行も政府も相続人を妨害することではいつまでもあいまいで強情のままだった。そのことは銀行や政府が多くを事を隠匿しているという確かな証拠なのだ。

三人の主要な相続人は、サンティが相続人に与えた検認済み遺言書、預金通帳、銀行取引証明書、領収書、全ての必要なパスワード、暗号単語、秘密の口座番号などをこれらの銀行に示したが、反応は同じだった。

四件の例外はあったが、銀行はそうした口座があることを否定し、問題の口座が銀行の貸金庫なのか大きな金塊保存庫なのかの回答も拒否した。

例えば、我々のCDに複製されているUBS(スイス連邦銀行)の書類によれば、UBSにあるサンティの最大の単一口座には金塊で二万トナがあった。この口座はサンティの死んだ時、魔法を使ったように名義がサンティの持つクラウン・コモデティ・ホールディングから、エドワード・G・ラズデル少将(Landsdale: 原文ママ)に変えられたのである。スイス銀行が行った意図的なスペル間違いは暗号の要素だということを記憶しておいても良いだろう。

ひとつの可能性として、この怪物口座に関して、サンティは黒幕の手先にすぎず、もう一人の手先、ランスデール將軍が取って代わったということである。

どうだい、どこかの政府以外に誰がスイスの大銀行でそれだけの変更をするだけの大きな力を持てただろうか？

UBS（スイス銀）単独で変更をしたとしても、新しい名義人として不適切なランスデール將軍を選ぶとは思えない。とは言え、一九七四年まで一〇年間ランスデールは政府の埒外にいて、エンタープライズ組織の創立者の一人だったし、アメリカの最富裕で保守の大物の幾人かと親密な仲間だった。

もしランスデール將軍とサンティがこの巨大なUBS口座の支配権を共有していたら、UBS（スイス銀）に名義をランスデールの名前に変更させることも可能だったし、それなら口座を彼の仲間がアクセスするのも可能だったろう。たぶん、アメリカ政府は関与していなかったのではないか。

金一オンス三百ドルとして、この口座には千九百二十億ドルの価値があり、ビル・ゲイツの正味の資産よりはるかに高額である。この金額は信じられるだろうか？

信じられるのである。もしもこの口座にアメリカ政府の多額な闇の金が含まれている秘密口座としたらである。

ちょうどまじめな偽札づくりが馬鹿げたスペル間違いをしないと同じで、正気な詐欺師が口座を巨額すぎるとは考えないだろ。

ロクサスの金の仏像事件を思い起こしてもらえば、マルコスがオーストラリア人の仲買人を通し、金塊を千六百三十億ドルで売却したことを証明する証拠を陪審員が見たではないか。

CDに入っている多くのスイス銀行幹部の署名入り資料群は、UBSが金塊やプラチナを含んで、しかもかなり多額である他の口座を所有していることを示している。

そうした巨額の口座はサウジ・アラビアのファハド国王のようなどつもない金持ちにとつてみれば不可能じゃない。

ファハド家は数十年間スイスに金塊を預けている。ジェミニ・コンサルティングによれば、世界的な民間銀行の資産は一九八六年、四兆三千万ドルだったが、二千年には十四兆ドルとなっていた。だからUBSのこの口座の金額もありえないことではない。

UBSの資料によると、クラウン・コモデティ・ホールディングスはサンティのクラウンエンタープライズの子会社である。グループの代表はアルフレッド・P・ラモスで、彼はモナコに登録したサンティの会社ディアズ&ポイロツテ・エンタープライズの役員だった。ラモスは宣誓供述書で「私は故人のドン・セベリノ・ガルシア・サンタ・ロマーナ、ラモン・ポイロツテ、もしくはホセ・アントニオ・ディアズを『わが老いた父から』という暗号で知っている、そして、ひとたび仕事が始まれば終わるまで放りだすな、作業が大変でも簡単でもうまくやれ、できなければなにもやるな、ということも知っている。」と述べている。

この訓戒は、我々が見てきたように、サンティがランスデールから一九四五年に学んだものである。それはサンティが自分の自筆証書遺言で引用している訓戒と同じだ。その訓戒はサンティの銀行口座で一貫して暗号文として用いられた。

半世紀以上たつての暗号文の再現は偶然ではない。

ビデオに録画された会計士タルシアナ嬢とのインタビューによれば、サンティの死後すぐにランスデールはシティバンク・マニラ支店のサンティの口座からニューヨーク支店への金塊を移すという不可解な動き



に巻き込まれた。たぶん、マルコスが差し押さえる前にフィリピンから持ち出しが行われたのだ。口座はサンティ名義なので、彼の資産管理を認められた受託者もしくはは主席会計士タルシアナ嬢のような法廷代理人の資格を有する人間の承認がなければそのような移転は違法である。もしランズデルが法定代理人の資格を持っていたとしたら、いったい誰のために彼は行動していたのだろう。

ひとたびフィリピンを離れたこうした資産は、資料が示すようにサンティがすでに持っていたアメリカのシティバンク、チェイス、ウェル・ファーゴ、ハノーバーバンク他の金塊と現金の口座に加えられた。

サンティの死後すぐに、サンティの自筆遺言証書はマニラで検認され、会計士タルシアナ、内縁の妻ルツと娘フローデリザが裁判所によって正当な相続人として指名された。ルツはアメリカへ赴きシティバンク・マンハッタン支店の口座の公開を要求した。そこで彼女は弁護士エレノア・ジャクソン・ピールに助力を求め、フィリピンの裁判所によって発行された行政証明書を預けた。こうしたことはニューヨーク裁判所に確認されるべきだった。弁護士ピールはサロゲート裁判所で行政の付属文書の発行を求めて仕事を進めた。その文書はシティバンク、チェイス、ハノーバーのサンティの口座へのアクセス権を内縁の妻ルツに与えるものだった。これにはずいぶん時間がかかった。

内縁の妻ルツは自分の用件を他の銀行にも強く求めたので、弁護士ピールは関係するすべての銀行の頭取に手紙を書き、サンタ・ロマーナの口座について照会した。一行たりとも銀行は回答をしなかった。

内縁の妻ルツはスイスに飛んで、2人のアメリカ人の友人とともにジユネーブのUBSを訪れた。アメリカ人のひとり、ジム・ブラウンによ

ると、「私はルツともう一人のアメリカ人と一緒に座った。その間、ルツはUBS(スイス銀行)の副頭取にサンティの金口座ナンバー「金口座7257」を示した。この銀行家はその番号が正しい口座番号だと認めただけでなく、その口座についてはよく知っていると聞いた。

友人ブラウンはその副頭取がルツにこう話したと言う。「わたしはあなたスイスにいる時に、この金口座の権利を主張することはお勧めできないね。なぜなら、スイスの銀行も政府もあなたがこの口座の中味を手にするのを認める前に、彼らにはあなたを最初に殺しかねない。わたしはあなたがどんなスイスの弁護士を雇うこともお勧めできない。なぜなら銀行は簡単に弁護士たちを買収するからだ。」

UBSの副頭取が殺人の脅迫をしたという見方を冷笑するかも知れないが、それならクリストフ・メイリの場合はどうなんだということだ。チューリッヒのUBSで警備員として夜働いていた一人の学生が一九九七年一月に、シュレッダーにかけられる予定の非常に古い書類と本を発見した。その書類と本はナチの死の収容所で死んだ預金者の資産に関するものだった。彼は数ヶ月前スイス政府が銀行に記録文書等を処分しないように命令したことを知っていた。彼はいくつかの書類を持ち帰りそれをチューリッヒのヘブライ協会に与えた。あとでどうしてそんなことをしたのかと聞かれて、メイリはこの間、映画「シンドラーのリスト」を見ていたのだと答えた。「何かをすべきなのは分かっていた。」と。

一ヶ月後、書類が別の人間によって公表されたとき、メイリはUBSでの一万八千ドルの仕事を解雇された。UBSの頭取のロバート・ステューダーはメイリが国際的ユダヤ人の陰謀団より金をもらっていたことをほのめかした。「スイスの銀行にある、いわゆる物言わぬユダヤ人の金のこうした問題は、何度も頭をもたげてくるのだ。我々にとっては全く問題にならない。問題は第二次世界大戦後徹底的に議論され、我々は

誠実に銀行のどの金もユダヤ人大虐殺の犠牲者に帰属するものかを調査した。なぜなら、この疑問を今回限りで決着させたかったのだ。われわれにとって、この事件は決着している。」

同様に、アメリカ国務省は一九五一年のサン・フランシスコ講和条約は日本人の戦争犠牲者のための賠償と補償の問題は解決済みだと主張している。同様に、アメリカ政府とマルコス家は山下將軍の金塊の話はただの俗説にすぎないと主張した。

UBSはシュレッダー事件を不幸な出来事と言ってごまかした。「経営幹部の誰もそのような決定を認めなかった。」ロバート・ステューダーは全ての公職からはずされたが銀行の名誉会長のままだった。

メイリは100回以上の殺しの脅迫を受け、妻や子供たちも脅迫を受けた。彼らはアメリカへ逃亡し、そこで隠れ家を与えられた。メイリはスイスの銀行によるナチの資産隠匿を調査している米国議会委員会の前で証言をした。

上院議員アンソニー・ダマートーはクリストフ・メイリを国際的英雄と呼び、「犯人は資料をシュレッダーにかけるよう命じた連中だ。」と言った。

怯えて意気消沈して、内縁の妻ルツはフィリピンに帰った。3年後、ルツと友人のブラウンは別の銀行と交渉するためにスイスに戻った。ブラウンの話では、この時二人はサンティの口座のひとつから累積した利息を回収することに成功したが、銀行は頑として金塊そのものを引き出そうとはしなかった。別の情報筋によると、ルツはこの回収を秘密にしていた、あまりにも長い間妨害を受けていたので、税金としてそのいくらかでも没収されるのはばかげたことだと感じていたからだ。

一方、サンティ所有の会社会計係、タルシアナ嬢は香港にあるHSBC（香港上海銀行）のサンティの口座にアクセスしようと試みた。タルシアナ嬢はサンティの税金コンサルタントであった弁護士アルテミオ・ロブリンのアドバイスに従って、サンティの自筆証書遺言に言及されている口座の存在を確認するようHSBCに要請した。タルシアナがすべての必要な暗号、パスワード、書類を示した後で、銀行の役員は彼女に口座はまだ満期を迎えていないのでアクセスできない、一九八八年になってからもう一度来るようにと言った。

次にサンティの娘、フロデリーザは三和銀行香港支店のサンティの口座にアクセスを求めた。彼女は一九七三年に香港支店へ多額の現金預金を示す通帳を持っていた。

最初、その三和銀行は一九七三年には香港に支店があったことを否定した。その時、あらゆる証拠書類が提出されたにもかかわらず、三和銀行はサンタ・ロマーナという顧客も彼の偽名を使った顧客もいないと断言した。

コーリー・アキノが大統領になった時、アキノのスタッフがオーストラリア人の財務専門家ピーター・ネルソンに助力を求めた。専門家はコンピュータが打ち出したデータとサンティの写真付きのパスポート四〇部を見せられ、「パスポートは多数の銀行口座と細かい点まで一致していました。……多くの口座の移転は、世界中の別のところに動かされる前に、まず香港で始まっていたのです。私は計算を進めながら頭の中で勘定をしていったのですが、四百億ドルは多すぎて数え切れなくなりました。私は木箱の写真を見せられましたが、そのいくつかは開いていました。もちろん、私はこの金塊の品質は保証できませんが、量的には十分保証しますよ。」と述べた。

アキノ大統領の支援者の説明によると、サンティは自分の娘に資産の大

部分を残していたので、娘のフロデリーザは地球上で最も裕福な婦人の一人になるはずだった。しかし、彼女が銀行に対し遺言書の意思を認定してもらおうとすると、パスポートに違った名前で作っている写真の男性のすべてが実際に彼女の父親であることを証明するように言われた。

一方、銀行は金については有利な状態だったはずだ。財務専門家ネルソンは言った。「私は、フィリピンの友人に方法は別にあると言った。もし、フロデリーザが発見の見返りに、およそ5パーセントの手数料をフィリピン政府へ渡すことに合意すれば、フィリピン政府は彼女に一生使うことの出来る以上の金を彼女に与えるだろうし、政府は口座からの金塊回収の推進に力を入れるだろうと言ってやった。彼らは私に感謝をして、シドニーに飛んで帰った。」しかし何も起こらなかったし、フロデリーザは貧乏のままだった。

最終的に全ての回収の努力をシティバンクに向けることが決められた。

シティバンクはジョン・リードが会長でCEOであった。リードの指導のもと、シティバンクは個人の海外金融（原文は offshore private banking となつてゐる。もっと他に良い言葉がないものか銀行員の方に聞いたけれど訳せなかつた。富裕層向けのコンサルタントを含む投資業務か？私には判らない）にしっかりと取り組むようになった。一千億ドル以上の海外預金額により、五千八百億ドルのUS B（スイス銀行）、二千九百二十億ドルのクレディ・スイスに次いで三位にランクされるまでになった。

国から国へ金を動かすことで、海外の資産は債権者、元配偶者、相続人からの訴訟から守ることができる。資金洗浄、証券詐欺、または麻薬を含む事件を除き、多くの外国の裁判所はアメリカの裁判所の命令を認めようとしない。それで原告は口座がある国の裁判所を通してアクセスするため戦わねばならないが、結局、金はすでに別の裁判管区に移されたことを知る

だけになってしまふ。これが次に述べることの鍵となる。

一九九〇年一二月、会計係のタルシアナ嬢はマンハッタンのシティバンク本部に出かけた。財務アドバイザーと立会人として活動する一人の友人を伴っていた。

「私たちは案内されてジョン・リードに会いました。」と彼女の友人が言った。

「私たちが口座に関する書類、パスワード、暗号文をリードに見せた時、その重大性に彼はびっくりしたみたいね。彼は真っ青になって、ひどくうるたえたの。彼の顔を見ればそれは一目瞭然だったわ。リードは会議室を急いで飛び出して行き、数分後、彼は数人のシティバンク専属の弁護士を連れて戻ってきたのよ。」

リードと弁護士はタルシアナ嬢に翌日来るように伝えた。

「私たちが翌日会議室に入った時、リードは二〇人の弁護士と一緒に座っていました。そして、照会された口座は存在しないと私たちに伝えました。」とタルシアナの友人は語った。

再びタルシアナ嬢と友人は立ち去った。思いついたことがあり、二人はアルバーニーに飛びニューヨーク州の税務署を訪ねた。公的記録の書類の中に、二人はサンティがニューヨーク州のシティバンクや他の銀行にサンティの名前や偽名、彼の所有する会社名で作ったすべての口座のリストを入力した（CDに複製済み）。二人はまた、こうした巨額の口座が生み出す利息にすべての州税と連邦税が免除されていることを発見したが、奇妙な税免除であった。

シティバンクへ戻って、二人はもう一度リードと彼の弁護士連中と対決することになった。タルシアナ嬢と友人は、彼らにニューヨーク州の納税記録簿のコピーを見せ、銀行が嘘をついていて、口座は存在したことを証

明した。タルシアナ嬢が持っていたサンティ自身の記録と書類によれば、シティバンクはサンティの財産である四千七百「」の金塊を保有していたのだ。

もはや、シティバンクはサンティの口座を持つていることを否定できないので、弁護士たちは二人の女に「契約の当事者」を連れてくるように素っ気なく言った。弁護士たちは当事者がだれのことかを明言する事は拒否したが、当然サンティの死骸のことだ。

弁護士たちはまたタルシアナ嬢には「法律で認められた」書類が必要だと言ったのだが、彼女はすでにその書類を見せていたのだ。弁護士たちは、シティバンクがフィリピン政府の金を引き渡したとしても責任を負わせることはないという声明を必要と言った。(またしても、銀行がその財産を保有していることを暗黙のうちに認めているということだ。)

このことは、そのファンドがマルコスが盗んだ金塊であるとフィリピン政府が主張していることを暗示している、けれど、その口座はマルコスが権力をつかむはるか前にサンティが開いたものなのに。

弁護士はイメルダ・マルコスの権利放棄を求めていると言ったが、それはマルコス・ファミリーが(現実であれ想像であれ)サンティの財産に対して要求をしてくるかも知れないと言ったことを意味している。最後に、弁護士はマニラのアメリカ大使館の権利放棄を必要と言ったが、明らかにアメリカ政府の権利放棄を意味していた。

こうした訳の分からない話は、銀行が次の対応を決めている間に、タルシアナの要求をかわすためと言うことは明らかだった。対応を決めるのに時間がかからなかった。

解決策は簡単だった。シティバンクはサンティの全財産をシティバンク・ニューヨーク支店からバハマのシティ・トラストへと国外に動かそうとした。このことは金塊をニューヨーク裁判所の管轄外に動かす効果があ

り、サンティの相続人から行われる全ての訴訟を封じ込めようとするものだった。法的にはそうした財産は、口座所有者もしくは相続人、または譲受人(企業会計担当者としてのタルシアナを意味する)の承諾なしにニューヨークの管轄内から移転させることは出来ないはずだ。

しかし、もし金塊が口座所有者も相続人も知らずに海外に移転されたのなら、回収のための負担は所有者と相続人にかかるだろう。金塊の大規模な搬送はまた、アメリカ財務省と連邦準備制度理事会が知ることもなく、承諾なしでも起こりえない。

バハマ当局の承諾なしに金塊がナッソーに入ることも出来なかった。しかし、そうした障害を切り抜ける方法があつたようで、たぶん金の所有者をシティバンク自体に帰することで、何人かの弁護士は「不適切な変更」と表現を弱めて屁理屈を言うのだろう。

この海外での策謀は一九九〇年の終わりまで進められた。一九九〇年と言うのは、その話が銀行職員によってエンタープライズのメンバーに漏らされた時なのだ。シティバンクの動きを中止させる対抗策は元CIA副長官レイ・クラインとジョージ・デポンティスによって始められた。ジョージ・デポンティスは、引退した元バハマの主席判事レオナルド・ノウルズ卿との友情も含めてナッソーに強力なコネがあるフロリダのロビイストである。クラインがアメリカ政府の助けを必要とする場合、元財務省の弁護士ロバート・A・アカーマンの助けを求めた。

弁護士アカーマンを急がせるために、クラインはアカーマンに手紙、メモそしてファックスを含む多くの書類を与えた。一九九一年一月にアカーマンが書いた手紙によると、クラインは、いかにして「ランズデル將軍のフィリピン時代に「サンティが、日本軍の戦争略奪品を回収し、それを「四二ヶ国の、百七十六行の銀行」に移したかをアカーマンに説明した。

クラインが言うには、これらの口座には多量の金塊と現金があつた。そしてアカーマンに、フィリピン人の原告、会計士のタルシアナとアメリカ政府で交わされた合意書つまり、アメリカ政府に帰属する金の多くがアメリカ政府に戻ることになる合意書の調停に関心があると言つた。

戦争金塊が戦利品であると主張されなかつたのに、どうしてそれを盗まれた人々の所有ではなく、アメリカ政府の所有になるのかが不鮮明だ。そういう場合、なぜ半世紀以上も、秘密にされていたのか？また、クラインがどのようにしてサンティの相続人の所有であるべきものからアメリカ政府の所有になるものを切り離すことが出来たのかもあいまいなままだ。もちろん、クラインの緊密なCIAとのコネにより、その切り離しをやり遂げたのであろう。

アラン・フォリンジャーによれば、「レイ・クラインは我々に、サンティとランズデールの金塊回収に関するCIAの資料ファイルは必ず全てに目を通したと言つた。」

フォリンジャーが言うには、クラインはブレトン・ウッズでの秘密協定と、そこから生まれた「黒い驚信託」のすべて、そして、いかにしてマッカーサー將軍とロバート・B・アンダーソンがサンティとランズデールを連れてゴールドデン・リリーの隠匿施設を回り巡つたのか、そしていかにしてジョン・J・マッククロイがM資金や他の政治活動資金の仕組みを立ち上げるキー・マンになったのかのすべて知っていたのだ。

クラインがCIAで長いキャリアを勤めたことから、彼がフォリンジャー、アカーマン等に話したことは信頼の置けるものである。第二次世界大戦の終わりに、クラインは国民政府の何を残存させるかを研究する若いOSSの分析官だつた。彼はそこで三年間を韓国に関するCIA主席研究員として過し、ジョン・シングロブ、ポール・ヘリウエル、ビル・キャセイ（キャセイはウォール・ストリートへ転出し、現在はダレス兄弟の仲間と

いつしよである）と手を組んだ。一九五八年から一九六二年の間、クラインは台湾のCIA局長をつとめたが、その職務は不正工作の責任者、フランク・ウイスナーから、彼が発狂する直前に引き継いだ仕事である。台北にいた時、クラインは東南アジア全域にわたる秘密の工作活動の責任を負っている。クラインは政治作戦学校（政治的戦争幹部養成学校）を設立し、そこではフィリピンや他の国からの訓練兵が教え込まれた。「共産主打倒のために、非情であれ。」

蒋介石が生きていた間、クラインは蒋介石大元帥の大酒飲みの子、蔣経国（CCK）と友達になつた。蔣経国は中国国民党の情報部局を支配していた。

クラインは「彼の中心的な飲み仲間」になつた。蔣経国が台湾總統として父親の跡を継いだ時、クラインの運命もそれに呼応して上向きになつていった。彼はアメリカ政府に戻り、機密情報収集を担当するCIAの副長官になつた。

クラインは歴史的な事情に精通し、金融面においても熟達していたし、多くの著名人を知っていた。クラインは個人的に戦時の中国国民党の秘密警察の長官、載笠（タイリー）將軍、上海の麻薬王、杜月笙（tu・yueh-sheng）、ヤクザの頭目、兎玉、フィクサー笹川、岸首相、田中首相、CIAのウイスナーとキャセイ、ヘリウエル、ランズデール、サンタ・ロマーナ、マルコス、シングロブ、シュヴァイツァーと知り合いになつた。

一九六六年に、クラインはジョンソン大統領と極東政策に関してひどく衝突したため、CIA副長官の職を解雇され、ボンのアメリカ大使館へ追放された。ジョンソン大統領が再出馬しないことを決めた時、クラインは帰任が可能になり、国務省の情報調査局長となつた。そこでの彼の仕事はマルコス大統領の闇金の動きを監視する事だつた。

ビル・キャセイのようにクラインはいつも金融情報に特別の関心を払つた。

彼はハーバード大学とオックスフォード大学からみごとな学業信任状を受けている。

一九七三年、台湾との極めて緊密な繋がりがあつたおかげで、クラインはニクソン大統領が中国と和解することでケンカをし、政府部局からの引退を余儀なくされ、ジョージ・ワシントン大学の保守的なシンク・タンクの長となつた。今やエンタープライズの陰の組織の要となる人物、クラインはレーガン大統領特別顧問となり、キャセイ、シュヴァイツァー、シングロープとは緊密に繋がっていた。

香港での会合を録音した音声テープを聞くと、カーティスはおだてられてニッポン・スターの金塊回収を助けることになり、クラインの名前がたびたび出てきた。

クラインがイラン・コントラ事件の聴聞会で議会を前に証言した時、彼はフィリピンのシングロープ將軍を訪ねたかどうかの質問を受けた。

クラインは、シングロープは空港で自分と会つたと言つた。

「シングロープとシュヴァイツァー將軍から十分に説明を受けました。シングロープがそこで、私の知つていた探査した場所に埋められている金塊や貴金属の回収のために調査をしていること、彼がこの財宝を回収出来る確かな兆候を掴んでいたこと、シングロープが財宝を回収しようとしているグループを代表していたことなどの説明です。シングロープとは財宝以外に議論したことはありません。シングロープは多くのものを私に見せました。また、そのことを信じさせることを話したし、シングロープが探査した埋蔵地域から多くの金塊や金が回収できそうだと感じたこと、回収がシングロープの唯一の目的だと話しました。私が知る限りの話です」。

この証言からは、クラインが議会に対して言い逃れをしており、クラインがアカーマンに話したことを打ち明けていないことが明らかである。彼の証言における基本的な歴史的地理的な細部が徹底して調査されたが、そ

れらはアメリカ国民が何も知らない内容だからである。

アカーマンの手紙によると、デボンティスは、最初はタルシアナ嬢がシテイバンクにサンティの会社の口座に幾枚かの小額小切手を預金することを提案したが何も警戒されはしなかつた。もしシテイバンクが預金を受け入れたなら、シテイバンクはタルシアナの身分をサンティの会社の会計係として暗黙のうちに入れ入れたということだ。その時にタルシアナが銀行に口座上のすべての取引に関する正規の明細書を彼女に送るよう依頼することが出来たのだ。もし銀行が明細書を送ってきたら、彼女は銀行口座にアクセスする法的権利を確立したことになり、口座からの引き出しを始めることも出来たのだ。

ことがうまく運ばなかつたので、デボンティスはバハマの裁判所にナツソーへの移転を防ぐために訴訟を起こす準備をした。訴訟を起こす前に、彼はシテイバンクにある取引を持ちかけたと言つた。テープに録音されたロバート・カーティスとの電話の会話の中で、デボンティスは、もしシテイバンクがこの取引を受け入れたなら、かれは七十二億八千七百九十三万七千ドルになる一五%の手数料を受け取るはずだと言つた。手数料一五%だとすると、このことは全体の取引が大体五百億ドルになることを意味する。この額はシテイバンクが国外へ動かそうとしていた額なのだ。デボンティスはテープのなかで、こうした多くの金が必要だと言っているが、「レイ・クライン、アカーマン、こいつにもあいつにも金を返さなくては」ならなかつたからだ。

影響力をつけるために、デボンティスはタルシアナ嬢と内縁の妻ルツからの代行権限を受けることが必要だつた。千九百九十一年九月、タルシアナは十頁の個人的サービスについてのビデオンティスと取り決めに同意した。代行権限についても同意したのである。しかし、デボンティスがシテイ

バンクにタルシアナがたったの二千五百万ドルを手にするだけでよしとする提案をしたため、タルシアナはデボンティスと絶交したのだ。タルシアナは十二の銀行から数十億ドルを追い求めているので、シティバンクとそんなちつばけな取引を受け入れることは危険な前例をつくることだった。

それ以後、デボンティスはすべての活動を内縁の妻ルツの和解金を取ることにはつきりと集中した。一九九二年六月三日、彼はロバート・カーティスに「シティバンクは実にしぶとい、やつらは一流銀行になろうとしているぜ。」と言っている。

数週間後、一九九二年七月、タルシアナ嬢と彼女の財務アドバイザーはシティバンクへ出かけ、CEOジョン・リードと彼の会議テーブルを挟んで顔を合わせた。二人はバハマへ移した金塊と現金の口座をニューヨーク支店へ戻すよう要求した。タルシアナ嬢によれば、リードは二人が資産が移されたことを知っていると言った時、再び「青ざめ動転し」、弁護士を呼んだ。またしても、女たちは得るものも無く立ち去った。

こんな侮辱を受けたためタルシアナ嬢はシティバンクを追求しようと決めた。彼女はデボンティスに再び自分の代行権限を任せた。エレノア・ピール弁護士はデボンティスから、バハマでの訴訟については今よりタルシアナ嬢と内縁の妻ルツの代理人となるという電話を受けた。千九百九十二年六月二十五日、一つの合意書がタルシアナ、ルツ、エレノア・ピール、デボンティス、レオナルド・ノウルズ卿、フィリピン人の弁護士ゾシモ・バナーグにより作成された。その合意書はデボンティスが訴訟前に最後の取引条件をシティバンクに提案することを認めていた。彼らはシティバンクがバハマへ移していた金塊五百億ドルを当時の市場レートより五十ドル安い一オンス三百五ドルという有利なレートで購入する事を容認していた。シティバンクは、市場価格で金塊を転売でき莫大な利益を得ることになり、その

上、不法な移転に対する訴訟を避けることにもなるのだ。

シティバンクが提案を拒否したので、デボンティスとレオナルド・ノウルズ卿はバハマ裁判所に訴訟を起こした。エレノア・ピールはナッツソーへ飛び、そこでデボンティスとレオナルド・ノウルズ卿に会った。ピールは我々に、レオナルド卿はピールに訴状を聞いて見せ、シティバンクはすべてを否定することで時間稼ぎをしているだけだという自分の解釈を述べた。

弁護士メル・ベリが論争に参加し、シティバンクの支店があるカリフォルニア州の裁判所でシティバンクへの側面攻撃を開始した。ベリがルツのために起こした二百億ドル訴訟では、ジョン・リードは、サンティの資産をリードの個人使用に不正変更をした被告者として名指しされた。ベリの友人によれば、ベリは健康に問題があり、シティバンクとリードに対する素晴らしい勝利で彼の弁護士としての職歴を絶頂に持っていく考えを楽しんでいた。ベリはブライアン・グリーンズパンというラス・ヴェガス・サン紙の編集主幹に手紙を書いた。「面白いネタだよ。最初からそんな気がしたね。しかし、今は世界中のいくつかの大変有力な銀行がサンティの預金を保有したことは確かだ。我々は世界中の銀行職員からいくつかの宣誓証言を手に入れた。銀行職員は、我々が領収書と預金通帳を示したにもかかわらず自分たちが受け入れた預金の存在を否定したのだ。」ベリは、サンティの財産は「山下將軍の財宝に由来している」に違いないと信じるだけの理由があると言った。

弁護士ベリの訴訟内容は個人財産の不正な移転に基づいていた。サンティの所有になる特別のシティバンク口座のリスト化をした後で、訴訟は次のように進められた。被告シティバンクの会長兼最高執行責任者ジョン・リードはシティバンクによるサンティ所有の金塊移転の陣頭指揮を執った。訴訟の最も重要な点は、「リードとシティバンクが組織ぐるみで例の

金塊を金の仲買人に販売し、現在も販売しており、販売の手続きを自分たちの都合のいいように変更している、ということであった。」という容疑にあった。

ペリの訴訟はまたチェイス・マンハッタン銀行、HSBC、バンク・オブ・アメリカ、ウェルズ・ファーゴ銀行の不法な移転の容疑をもたらした。こうした銀行は全てカリフォルニア州に事務所を持っていた。

各銀行はそれぞれサン・フランシスコの法律事務所の大層な陣容で反撃に打って出た。チェイス・マンハッタン銀行はフォルジャー&レヴィン事務所。ウェルズ・ファーゴ銀行はヘラー・エーマン・ホワイト事務所。HSBCはリプリー・ダイヤモンド事務所。企業としてのシティバンクと個人的に被告として名指しされたジョン・リードはステイフェル・レヴィット・ワイズ事務所。バンク・オブ・アメリカは社内の総合弁護士を代表とした。銀行は都合のいい言い分だけを繰り返した。

更なる調査と発見の後で、ペリは重大な国家機密に偶然たどりついたと結論づけた。ペリは友人に、シティバンクのジョン・リードはレーガン大統領、ジェイムス・ベーカー、ビル・キャセイ、マーガレット・サッチャー首相らの陰謀に加担し、山下将軍の金塊を米英の秘密の活動に資金援助するために使ったのだと話した。ペリはその計画を「紫インクの書類」として言及した。

不幸にも、ペリの健康はそれからの二年半ちよつとで急激に悪化し、事件の解明があんまり進まないうちに一九九六年に死亡した。彼の法律事務所でのペリの仕事を引き継いだ連中は同じような熱心さで追究しなかったし、リードやこれら五大銀行相手のペリの訴訟はまだ決着がついていない。

遅延、激変、妨害、脅迫そして挫折の歳月の後、二千年にエレノア・ピールはニューヨーク・サロゲイト裁判所に新しい申請書を提出した。それはルツとピールにサンティの資産の共同管理者としての権利を与えニューヨーク州にあるサンティの資産の所在確認の活動を認めさせる内容だった。ピールは我々に、自分は「ニューヨーク州にある銀行のサンタ・ロマーナの全ての金塊も、以前銀行にあつてどこか別の場所にと移された金塊も回収する権利」を持っていると言った。

シティバンクで全てがうまくいったわけではない。シティバンクは資金洗浄の罪で告発を受けた。一九九八年十二月に、会計検査院はシティバンクがラウル・サリナスのために一億ドルの資金洗浄をしていたと結論づけた。ラウル・サリナスは不祥事を起こした元メキシコ大統領カルロス・サリナスの兄である。会計検査院の報告書には、サリナスが複雑な資金の出所、目的そして実質所有者をごまかす資金管理システムを作り上げるのをどのようにしてシティバンクは助けたかが記載してあった。一九九六年十二月、CIA長官ジョン・ドイチエは辞任した。

一九九七年、CIA長官ジョン・ドイチエは疑惑の中で辞任し、すぐにシティバンクの重役となった。二千年十一月、シティバンクでは、突然もうひとつのスキャンダルが発生する直前に、リードがCEOを辞任した。この時、シティバンクはロシアの大物イラクリ・カベラズの八億ドルの資金移動が発覚し困惑していた。

イラクリは二千以上のダミー会社をデラウエアに設立し、そこへシティバンクや他の銀行を使い十年間以上にわたり、彼の金を注ぎ込んでいたという。

二人のシティバンクの顧客は、今は無きナイジェリアの独裁者、サニ・アバカ將軍の息子たちで、税金、偽造契約、賄賂などから四十億ドル以上



を横領したかどで告発されていた。アバカの息子モハメドが当座貸し越し三千九百万ドルをシティバンクに緊急の要請をし、シティバンクは彼への資金を3つの違った口座へ払い込んだ。

奇妙なことにシティ信託にあるサンティの五百億ドルの処理について会計検査院が行った調査と同じものは行われていなかった。

銀行はどうしてあんなにごまかすのだろう、そしてどうして口座を持つていることを否定できるのだ？

その答えは対応を遅らせることで多くの金を生み出せるせいだ。メリル・リンチは長年マルコス資産の三千五百万ドルを公表せず、裁判所のその資金を手放す命令をされた二十年の末までひと言も言わなかった。こうした年月の間、莫大な利益が休眠資金からもたらされた。スイスの銀行は頑としてマルコスの口座を持っていることを否定したが、二〇〇一年に、イレーネ・マルコスとその夫は百三十四億ドルの資金をスイスの銀行からフランクフルトのドイツ銀行へ移し資金洗浄を試みたかどでドイツ政府から告訴されたのである。数十年間、同じスイスの銀行はユダヤ人大虐殺犠牲者の資産が存在する事を否定してきた。相続人たちはあらゆる種類の証拠を示したが、結果としてそうした書類は偽物だと言われただけだった。もし彼らが強く求めると、偽物を使って交渉した容疑で逮捕される危険を冒すことになる。しかし、誰が書類を偽物だというのだ？

例えば、我々の作ったCDに複製されている資料は、インドネシアのスカルノ大統領がスイス銀行に預けた金とプラチナの量がスイス銀行信託の全メンバーにより保証されているとスカルノに示した証明書である。保証したメンバーの署名は目立つように誇示されており、簡単に正当であると確認される。けれども、スカルノの相続人たちが口座を照会しようとするあらゆる努力は失敗し、さらにスカルノの資産が存在す

る事自体が一笑に付された。あるスカルノの貴金属証明書が実際には偽物かも知れないのに、専門家の意見が出されるまでに、どうして確実に知り得るのか？

問題の銀行は詐欺だと主張することが利益に繋がるので、正当であると主張することは決して受当な判断ではない。ノルベルト・シュレイ事件で見たように、裁判所で書類を審査することだけが、手段が不正行為であると云う裁定がなされ得るのである。

あなたはどこで向きを変える事が出来ますか。もし、あなたがある銀行に書類が本物か偽物かを知りたいだけだと言えば、まず間違いなく、すぐその場で尋ねただけで逮捕される。あなたが尋ねない時でさえ、逮捕されるかもしれない。

オーストラリア人の仲買人ピーター・ジョンストンの奇妙な事件を紹介しよう。彼はヨーロッパでUBS(スイス銀行)の金塊の証書を現金に換えるよう顧客に頼まれた。ジョンストンは旅行中、金証書を持ち運ぶことは望まないので、オーストラリアのウエストパック銀行ロンドン支店に「保護預かり」にしておいた。彼はひんぱんにエストパック銀行にその金証書を提出していた。彼はウエストパック銀行に証書が本物であることを証明するように依頼しなかった。それでも支店長は「胸騒ぎ」がして、ジョンストンの諒解なしでUBSにUBSにコピーをファックスして、それが本物かどうかを問い合わせた。UBSはいつも原本を調査することなしに「非公式に」証書を偽造だと声明した。どんな書類も偽造だとみなし、「公式に」は偽造だと声明を避けるのがUBSの政策だった。なぜなら、公式に言明することは裁判所での宣誓証言と同じ効力を持つからだ。責務を避けている内は、非公式な意見として偽物だろうと疑問を投げかけるのだ。

UBSはいつも証書が偽造だとして、金証書を現金化しようとする

人々を追い払っている。普通ロンドン市詐欺特捜部は非公式情報に基づいた嫌疑を追及することはしないが、今回は詐欺特捜部が詐欺罪を仕組んだ。

ジョンストンが一九九五年三月六日にウエストパック銀行の事務所に入った時、彼は逮捕され、詐欺未遂で告発された。なぜなら、金証書は偽物で、ジョンストンは将来的にそれを現金化しようとしたからである。驚いたことに、この怪しげな罪で有罪となり一八ヶ月の服役で元気をなくしてしまった。UBSが実際に証書を偽物だと立証したことは一度も無く、ただ証書がチューリッヒのUBSで発行されたものでなかったと言っただけである。これは巧妙なごまかしである。なぜなら、UBSの金塊取引はチューリッヒ支店では行われておらず、チューリッヒ空港の近くにあるグラトブルグにある子会社のワーブルグ・ディロン・リード社で行われているのだ。

要するに、ジョンストンは偽の証言と、やる気も無い何らかの罪で間違っただけの服役したということになる。ここにはシュレイ事件と多くの類似点がある。

金証書の専門家、ヴォルフガング・イエッチは、そうした文書は「多くの書式を必要とするが、まず銀行業務の書式には無いものだ」と説明する。

「それらは本来、秘密の銀行業務の書類によるもので、公的な領域には存在しないものだ・・・関係する金額が大きいくらいほど、事情を知る人々の集団はより緊密になる・・・銀行の中枢が秘密の銀行業務の存在をずっと知らないことはない・・・資金のオーナーは・・・証書を保証する多くの別の書類を受け取っているはずだ。オーナーは、証書の存在を証明できる人々だけの詳細情報を書いた手紙を受け取っているはずだし、暗号化された保証番号も受け取っている。」イエッチは、典型的な暗号は「厳密なスペリング上か、文法的間違いを含んでいる・・・」と言った。

そうした間違いのため、銀行が望めば、証明書を偽物として公然と非難することが出来るのだ。

この章で我々は、サンティの相続人が全ての必要な書類と暗号を示し、それでも妨害されたのを見てきた。我々は第9章で、日本大蔵省が「57年債権」が通常の日本政府の債権とは違って見えるように慎重に企んで、「57年債権」を偽物と非難し、大蔵省が支払いを逃れるようにしたことを見た。UBS シティバンクや他の銀行が同じ事をしたとしても驚きでもなんでもない。顧客が死ぬと、顧客がビュッヘンウオルドの受刑者がインドネシアの大統領だったかは、どちらでもよくなる。銀行は金を保持するためには何でもやるだろう。

ここにジョン・ケネス・ガルブレイスが「金の研究、とりわけ経済学の別の分野での研究において、複雑性は真実をごまかすために、または真実を避けるために、真実を明らかにしないために用いられる。」と主張したことのひとつの見本であろう。

この背景に反して、米国財務省検察局がいかに早くスイスの銀行の側面に駆けつけるかを見ることは意味深いことだ。なにせある顧客が銀行へ歩いて入り、金の証明書が本物であるかどうかを訊ねる時なのだから。

一九九六年三月に、フィリピン人の弁護士ベン・アラゴネスは退職したウォール街の仲買人W・R・コットン・ジョーンズと会った。アラゴネスはスイスに金塊預金を有する巨大資産の管財人だった。彼はコットンに金証書を現金化しようとしてスイス当局にどのように逮捕されたかを語った。アラゴネスは刑務所で三カ月間を過ごし、再度スイスに入ることを禁じられたのだった。チューリッヒへのもう一度の旅行した時は、アラゴネスと妻は誘拐され脅かされたと言った。

UBSが彼を脅して永遠に追い払うためにこんなことまでやるのだと

彼は聞かされた。

コットンは空想家だったので、スイス銀行のニューヨーク支店が弁護士の証書のひとつを本物かどうかコットンに告げるかどうか様子を見ようと提案した。コットンは「金証書」を現金化しようとしていなかったし、そいつは危ないことに違いない。もし彼が公証された写真複写を取るだけだったら原本は押収されることいだろう。用心深く、彼は金額が最少のたった二十五万ドルの証書を選んだ。

彼は次のように言った。「一九九六年三月二十日にニューヨークのシテイバンク株式会社に歩いて行き、シテイバンクが発行し連銀のシールを貼った二千五百ドルの預託証明書を確認し、本物であると証明するよう依頼したのだ。」シテイバンクの職員は彼に、確認のためその証明書を置いていき、二日以内に戻ってくるように頼んだ。

彼が三月二十二日に再び訪れた時、銀行職員の振りをした三人の男が金証書の原本を要求し、更に脅迫めいた口ぶりをした。コットンが彼の写真複写を引っつかもうとした時、3人の男は素早く立ち上がり、米国財務省検察局の捜査官だと名乗り、バッジとIDカードを示した。彼らは、コットンの行く手をさえぎり、もしこれを無理やり支給させようとするなら、連邦捜査官に挑戦する事になると言った。

「私は書類が有効か否かをこれまでに知っていたことを否定し続け、そして現在も否定している。彼らは私に20年間刑務所に入ることにするぞと言った・・・協力すればいいけれど、そのほうが楽だぞ。と言ったのだ。」

九十分脅された後、コットンは下町へ連れて行かれ、二通の米国地方裁判所大陪審の召喚状を渡され、検察局捜査官のトム・アトキンソンの

事務所にも月曜日の十時に来るよう命令された。コットンが出頭した時、かなりの威嚇を受けた。その上、だれも金証書を偽物呼ばわりはしなかった。コットンは翌日大陪審へ出頭するよう言われた。

コットンが時間きっかりに到着したが、彼の出頭は必要ではないと告げられただけだった。びっくりして、彼は上院議員フィル・グラムに手紙を書き、いかに検察捜査官が彼の権利を侵害したかを述べ、ことの真相を明らかにするのを助けてくれるよう依頼した。法務省はグラムに、「コットン・ジョーンズ氏の主張は財務省と通貨監督官事務所に対する訴訟の眼目をなすもので、その訴訟は二次控訴審で現在審理中である・・・法的、倫理的に考慮して、この件についてこれ以上のコメントは出来ない。」と述べた。これは真実ではない。訴訟などないのだから。法務省がグラム上院議員に嘘をついているか、法務省が財務省に間違った情報を知らされているかなのだ。

一九九九年七月、法務省はグラム上院議員に「この問題は少し前に決着した。市民権が侵害されたというジョーンズ氏の申し立てに関して、彼は地域の連邦調査局に情報と助言をもとめて接触したらいいと思う。」と述べた。グラムが主張を続けた時、通貨監督官にこう告げられた。「・・・スイス銀行株式会社はこれまで米国通貨監督官事務所の規制の下にあったと云う事実はない。全ての将来の対応は・・・連邦準備金制度の方に仰ぐべきだ。」昔ながらのごまかしである。

コットンはむっとした。「どういっわけで米国のどの銀行も自分たちの利益のために連邦政府関係機関に介入させたり、個人財産を没収（窃盗）させたりするんだ？財務省秘密検察局は銀行の利益のために私を拘留し、尋問し、怖がらせて、脅迫し、大陪審の召喚状を私に発行するどんな権利を持っていたのだ？」グラム上院議員はアメリカ政府のやり方を十分に知っ

ていたので、それ以上ことを推し進めようとはしなかった。グラム議員は忙しくて手いっぱいだったのだ。

こうした詐欺行為、資料の押収とその偽物宣言がなされる理由は、これらの資料が莫大な金額の価値があるからなのだ、とロージア教授は主張している。ひとたび米国財務省がその書類を手に入れてしまえば、その書類は慎重に政府間の基準に従い現金化することが出来るのだ。

もしそうなら、それはそれぞれの政府によって行われる凶器を持った強盗行為と同じ新しい形の犯罪ではないか。意図的に対応を遅らすことで物事はドラマチックじゃなくなるのだ。

メル・ベリは彼の訴訟が裁判で進行する前に死んだ。同じ年、一九九六年三月に、レイ・クラインもまた死に、法的策謀のなかでもう一人の人間も追放することになった。レオナルド・ノウルズ卿の健康が悪化した時、彼がタルシアナ(会計係)、ルツ(内縁の妻)、デボンティス(ロビイスト)やクラインのためにナツソーで起こした訴訟も立ち消えになった。

ノウルズはナツソーを去りジョージア州メーコンで彼の息子と暮らし、そこで一九九九年に亡くなった。二〇〇一年十一月に、ルツ・ランバノはフイリピンで亡くなった。

ユダヤ人大量虐殺の犠牲者の金を公表しないで伏せているスイスの銀行のように、アメリカの銀行はただ長い歳月を待つだけでよく、サンティの財産を争った連中もみんな死んでしまったのだ。

今のところ、メッツセージは次の通りである。「あまり多くを要求しないことだ。さもないと監獄へ入ることになるぞ。」ダグラス・バレンタインによれば、一九七六年議会委員会が犯罪活動における連邦政府機関の役割を調査している時、議会の委員会でCIA長官ジョージ・H・W・ブッシュの代理人、ドナルド・グレッグは委員会のメンバーに最後通告をした。「ほ

どほどに手を引いたらどうだ。さもないと軍法違反の危険に直面することになるぞ。」

今日でも、こうした事に共通する事例は見る事ができる。つまり、CIA幹部ジェイムズ・B・ブルースは二〇〇二年七月に、ジャーナリストに対する機密情報の継続的漏洩を止めることを決めてこつ宣言したのだ。

「CIAはどんなことでもやるようになった。たとえジャーナリストの家々に特別機動捜査隊の派遣を決めたとしてもだ。」

(訳者注、この章はとても登場人物が多くわけが分らなくなりました。やはり登場人物の紹介は必要だと思います。全部が翻訳できた時に考えます。)